

団体名： Assistance Dog Institute

所在地： PO Box 2334  
Rohnert Park, CA 94927

- ① 5週間～24ヶ月
- ② 性別問わず
- ③ シェルター犬以外  
(シェルター犬は過去の経歴が全くわからぬためリスクが大きすぎる)
- ④
  - ◆ 恐怖心
  - ◆ 攻撃性
  - ◆ 捕食性の衝動
  - ◆ 高活動性
- ⑤ 100% 避妊・去勢
- ⑥ 何らかのテストは必要 (返答には特定のものが明記されず)
- ⑦ パピーテストは有効ではないが活性がそれほど高くないゴールデンやラブが最適とされている

団体名： Susquehana Service Dogs

所在地： 555 Le Sentier Lane  
Harrisburg, PA 17112

- ① 8週間～18ヶ月
- ② 性別問わず
- ③ ◆ ラブラドル・レトリバー
- ④ ◆ 攻撃性
- ⑤ 100% 避妊・去勢
- ⑥ ADI Public Access Test  
組織独自のテスト
- ⑦ パピークラスは実施、パピーテストはやらぬ

団体名： Texas Hearing & Service Dogs, Inc.

所在地： 4803 Rutherglen  
Austin, TX 78749

- ① 18ヶ月～24ヶ月
- ② 性別問わず
- ③ ◆ ゴールデン・レトリバー  
◆ シェルター犬
- ④ ◆ 攻撃性  
◆ 過度の服従心  
◆ 人間に対する関心の欠如
- ⑤ 100% 避妊・去勢
- ⑥ 実働前にテストは実施
- ⑦ パピーテストではなく成犬のスクリーニングを行う  
検討項目：
  - ◆ 攻撃性
  - ◆ 憶病
  - ◆ 持来
  - ◆ クリッカー・トレーニングに対する感度

追加コメント：

時には犬のスクリーニングよりもユーザー候補の選択の方が困難である。

団体名： East Coast Assistance Dogs

所在地： 149 Newfield Rd.  
Torrington, CT 06790

- ① 14週間～12ヶ月
- ② 雄
- ③
  - ◆ ゴールデン・レトリバー
  - ◆ ラブラドル・レトリバー
- ④
  - ◆ 攻撃性
  - ◆ 捕食性の衝動
  - ◆ 縄張り、飼主等を「守る」傾向
- ⑤ 100% 避妊・去勢
- ⑥ 卒業時に以下の項目をチェック
  - ◆ 公共の場での落ち着き
  - ◆ 持来の確実性
  - ◆ 基本的服従項目（脚側行進、横へ、オスワリ・マテ、フセ・マテ）
- ⑦ AKC パピーテスト使用

\*注：同団体は返答期限内に資料が提出されなかったため本文のデータの中には含まれていない。

## 用語解説:

### 犬種:

#### ラブラドル・レトリバー

北米原産であるが英国で改良され今日の姿となった猟犬。体格はがっちりしており体毛は短い。尾のつけ根、首などが太くがっちりしている。

温和な性格の個体が多いいため猟犬としてのみならず昔から盲導犬としても多く用いられている。最近はその性格、及び訓練性能故に災害救助犬、麻薬探知犬等々作業犬としては最も幅広く活躍している犬種と言えよう。

ただし、HD（股関節形成不全）などの遺伝疾患が近年大きな問題となっている。

#### ゴールデン・レトリバー

英国原産の猟犬。ラブラドル同様体格はがっちりしている。体毛は長く、金色であるためにその名が付いた。

ラブラドル同様性格は温和であり、盲導犬にもながく用いられてきた。ただし、やはりHDの問題がある。

ラブラドルとゴールデンのF1クロス（第一世代の混血種）が極めて作業犬として安定しているとも言われている。

#### レトリバー

この言葉は様々な犬種に用いられているが、日本語ではレトリブとは持来、つまり何かをくわえて持って来ることである。

「レトリバー」と名の付く犬種は猟犬の中でも獣猟犬ではなく鳥猟犬であり主として、獲物（鳥）の回収を行う犬である。

鳥の体をいためずにくわえて主人の元に持ち帰らねばならぬため、レトリバー犬種は「ソフト・マウス」（そっとくわえることのできる口）を有しており、それ故に人間のために物を運ぶ作業にも適している、といわれているのである。

#### シェルター

これは飼主不明の犬、もしくは飼主に所有権を放棄された犬などを収容している施設である。日本では行政が運営している引き取り施設しか大規模なものはないが、欧米においては大型の民間愛護団体運営の施設が多数あり、常時里親募集等の活動を通して犬を「社会復帰」させている。米国のサービス・ドッグ育成組織の中にはこのようなシェルターから適性のある個体を引き取りサービス・ドッグとして社会に役立てることが大切である、と主張しているところもあるが、リスクが大きすぎる、とそれに反対の意見を唱える者もいる。



## 介助犬定期健康チェック表（2 / 2）

介助犬協会

レントゲン 検査	① 股関節 異常なし ・ 異常あり ( )	年	月	日	撮影
	② 肩・膝関節（必要な犬のみ） 異常なし ・ 異常あり ( )	年	月	日	撮影
慢性・難治疾患	なし ・ あり ( )				
眼疾患	なし ・ あり ( )				
他に必要な 治療・手術	なし ・ あり ( )				
その他・行動上の問題点など					
この犬が介助犬として働くことに、問題なし 問題あり ( )					
上記の通り診断します。					
年                      月                      日					
医療機関名 住      所 電      話 獣医師名					

# 指示語

Come by heel	左横につく (立っている状態)	Watch	見る	
Come by side	右横につく ( " )	Take	くわえる	
Come by front	前につく ( " )	Hold	くわえている状態を保つ	
Come by back	後ろにつく ( " )	Bring	持ってきてくる	
Come by stand	立つ	Give	渡す, 放す	
Heel by	歩調を合わせる	Touch	さわる	
Heel by fast	早く歩く	Pull	引っ張る	
Heel by slow	ゆっくりに歩く	Push	押す	
Let's go	進む	Up	前足だけ上げる	
Halt	止まる	Off	離れる, 降りる	
Back up	後ろ向きで歩く	Soft	やさしく	
Straight	まっすぐ	Empty	排尿	
Right	右へ	Pup	排便	
Left	左へ	No bark	吠えてはいけない	
Walk right	斜め右へ	No sniff	臭いをかいではいけない	
Walk left	斜め左へ	No bite	咬んではいけない	
Come about	右へまわる	No jump	飛びついではいけない	
Turn	左へまわる	No lick	なめてはいけない	
Brace	足を踏んばる (支え)	No chew	くちやくちや噛んではいけない	
Sit	座る	Good	良い	
Down	伏せ	OK	しても良い (許可)	
Stay	待て	It's OK	大丈夫	
Come	おいで	Yes	そう (それでよい)	
Go ahead	先に行く	No	いけない	
Kennel down	身体ごとと下がる、何かの下へ入る	Enough	それ以上しなくてよい	
Kennel up	身体ごとと上がる	Pay attention	集中しなさい	
Forward	一歩前へ	Easy	落ち着いて (興奮しないで)	
Go pull	引っ張りながら進む	Leave it	それに興味を持たないで	
Go around	避けて通る (水たまりなど)	House	ケージの中へ	
Step right	一歩右へ	Over there	向こうに、あそこに	
Step left	一歩左へ			



## 介助犬としての適性評価 (Bringing)

### 使用する物

1. 日用品・・・ゴミ箱、財布、ペン、靴、布 (タオル、靴下) カセットテープ、プラスチックの容器 (大、中、小)、ビデオテープ、スプーン、ペットボトル、電話の子機、ポケットティッシュ、本、etc.
2. 重い物・・・タウンページ、サラダ油 (500g)
3. 音のでる物・・・連なった鍵、石の入った缶
4. くわえにくい物 (大)・・・杖
5. くわえにくい物 (小)・・・テレホンカード、封筒
6. 不快感のある物・・・たわし、ピン、陶器
7. 噛みちぎれる物・・・サランラップの芯、ファックス用紙の芯、空のティッシュ箱

\*犬に危険がともなうものは避ける (フォーク、コイン等)

### Situation

- A. 投げる
- B. 見せながら置く
- C. 最初から置いてある
- D. 高さのあるところに置いてある (テーブルの上)
- E. 物の中へ入れる (ゴミ箱の中に靴) → 物への執着心、チャレンジ精神、考える力があるか
- F. 見せながら隠す → //
- G. 取りづらい所へ置く (閉所) → //
- H. 出来るだけ遠くへ投げる → 人と犬との距離をとり、人が離れたところにも取りに行くか
- I. (使用する物の) 7を与える → ビリビリと細かく噛みちぎるか、又、その後の様子

☆約10分間の間に用意した物を使って Situation A~G を行う。

☆使用する物、Situation は共に順不同。

☆評価時のハンドラーは犬が面識のない人で、まずは屋内、そして屋外で行う。

Bringing が介助犬としての仕事に結びつくには、3つの要素が必要である。

1. 生まれつき持った意欲、興味、好奇心
2. 人間と一緒に楽しむこと、協調性
3. 犬自身の楽しみであること

\*このいずれかが欠けても介助犬にはなれない。



# 介助犬としての適性評価 (OBEDIENCE)

犬名 :		才	ヶ月	(オス・メス)	担当者名
最終評価日 :	年	月	日		

項目	具体的な評価内容	矢澤	水上	斎藤	内山
SIT	室内				
	テニスコート				
	人混み				
	リードなし(室内、テニスコートのみ)				
	見知らぬ人				
DOWN	室内				
	テニスコート				
	人混み				
	リードなし(室内、テニスコートのみ)				
	見知らぬ人				
STAY	室内				
	テニスコート				
	人混み				
	リードなし(室内、テニスコートのみ)				
	見知らぬ人				
COME	室内				
	テニスコート				
	人混み				
	リードなし(室内、テニスコートのみ)				
	見知らぬ人				
HEEL	室内				
	テニスコート				
	人混み				
	リードなし(室内、テニスコートのみ)				
	見知らぬ人				
LOOK	室内				
	テニスコート				
	人混み				
	リードなし(室内、テニスコートのみ)				
	見知らぬ人				
実施日	年 月 日				
コメント	( ) ( ) ( ) ( )				
評価					

- 評価基準
- |              |                       |
|--------------|-----------------------|
| 1 出来る        | 3 トレーニングを続けて様子を見てから判断 |
| 2 トレーニングで矯正可 | 4 不適格                 |

## 介助犬としての適性評価（OUTSIDE）

犬名	：		才	ヶ月	（オス・メス）	担当者名
最終評価	：	年	月	日		

項目	具体的な評価内容	矢澤	水上	齋藤	内山
人	以下の人（物）を前にしての反応 ・ランニング中の人 ・小さい子供 ・ヘルメット、サングラス、マスク等を着用している人 ・ボール遊びをしている人 ・走行中のオートバイ、自転車				
動物	以下の動物を前にしての反応 ・つながれている犬 ・散歩中の犬 ・f.r.e.eの状態の犬 ・猫 ・鳥 他の動物からの威嚇、攻撃に対して過剰反応をしない				
音	工事現場等の騒音の横での反応 突然の音に対して過剰反応しない				
嗅覚	食べ物（ガム、生ゴミ等）に興味を持たない 電信柱、植え込みなどの臭いに執着しないで歩く				
集中力 意欲 興奮	外出時もしリード保持者に対して注意を向ける 天候などに左右されず、リード保持者と行動をともにする 車内で落ち着いている				
性質	人・動物の接近・接触・挑発に過剰に期待し、コントロール下に 置くために相当の努力を要する 突発的な動きが多く、自己抑制出来ない氣質を本質的に持っている 評価基準 息遣いを荒くし、自ら興奮状態になる				
	H・・・High                      M・・・Medium                      L・・・Low				
実施日	年                      月                      日				
コメント	{                      }				
評価					

### 評価基準

- 1 興味を示さない（出来る）
- 2 興味を示すがリード保持者の指示に従う
- 3 リード保持者の指示に従わない→トレーニングで矯正可
- 4 リード保持者の指示に従わない→トレーニングを続けて様子を見る
- 5 不適格

# 介助犬適性評価（性質） No. 1

犬名 :		才	ヶ月	(オス・メス)	担当者名
最終評価日 :	年	月	日		

1. 総合審査	犬の全身、特に腹部、脇腹、頭部、口の周辺、足先など敏感な部分に触られた時の犬の反応
〔	〕
2. 過剰な愛撫、ぎこちない愛撫	手足など身体に不自由を持つ人が不安定な姿勢で犬を撫でるといった状況の疑似設定での反応
〔	〕
3. 拘束的な抱擁	犬が強く抱きしめられることを受け入れるかどうかの反応
〔	〕
4. ぎこちない人に会う	不安定な歩き方、歩行器や杖を使っている歩行、奇声を発しながらの接近などに対する反応
〔	〕
5. 怒鳴り声	近くで人が大声で怒鳴り合っている設定での反応
〔	〕
6. 後ろからの衝突	不意に後方から人がぶつかってきた場合の反応
〔	〕
7. 複数の人々による愛撫	複数の人々に同時に撫でつけられた時の反応
〔	〕

8. その他、不意の出来事  
不意の出来事に対する反応（例えば、急に物を投げられた時）



9. 見知らぬ人に預けられる  
リード保持者がリードを見知らぬ人に預け、犬の前から2分間、姿を隠した時の反応



10. 社交性  
犬が人間に興味を持ち、交流を楽しんでいるかどうかを審査する。



11. 意欲  
犬が休息中（熟睡時）静かに声かけをし、どのような反応をするか観察する。  
（起き上がり、側に来る。顔だけ上げ、見る。無視。気が付かない。など）



# 介助犬における子犬の選択 プログラムの作成についての考察

杉本恵子

南小岩ペットクリニック

## 目 的

日本の社会状況及び介助犬トレーナーの数、育成にかかる時間、経費、育成犬となる犬の数などの現状をかんがみるとき、効率よく介助犬に適した犬を選択していく過程は、必須な第一歩といえる。各育成団体は、介助犬となる子犬との出会いに精力的に取り組んでいる今現在である。

筆者は数年前に介助犬育成に関わる貴重な経験をした。介助犬と共に生活し、更に次代の介助犬育成に取り組んでいたグループとの共同作業の中で、犬の心身両面での健康管理をする獣医師として、また、日常の犬のカウンセリング、しつけ教室の経験から、トレーニングのアドバイザーとして参加をした。その体験を通して、日本における「子犬の選択プログラム」作成の必要性を実感し、今後に生かすべく考察を試みた。

介助犬の選択肢としては次の3方法がある。

1. トレーニング可能な年齢の子犬から選ぶ
2. 介助犬の仕事に適した犬種の中から選ぶ
3. 作業適性を認める成犬（犬種を問わず）の中から選ぶ

今回の調査は介助犬育成における子犬の選択方法についての調査とより効率よく適した犬を選択するプログラム作成の考察を目的としている。

## 方 法

体験からの問題提起

1. オーナーの申し出があったときの子犬の性格、適性の評価はどうであったか細かい評価の記録の必要性。
2. 成長段階における再評価とパピーウォーカーとしての生活の適切な指導が行えたか成長段階での介助犬として育成していく目標と方法を確認する重要性。
3. 育成団体及びトレーナーとパピーウォーカーの情報交換としての交流は密に行われるべきである。
4. 各段階において、記録と評価の結果を次の成長のステップに反映していったかどうか。

5. 介助犬として不適な場合の対処法を明確に取り決めてあったかどうか。

方法として

- 1) 介助犬に必要な高度の適性リストより親犬の遺伝的な特性を評価する。
- 2) 子犬の行動の発達段階において、適性評価を行う時期を検討する
- 3) 評価方法については Dr. M.W. フォックスの子犬の性格を読みとる方法を基本として、現在介助犬の子犬のための派ピーテストとして実働しているものを参考とした。

## 結 論

介助犬の作業内容は、ものを持つ、拾う、引っ張る、押す、支えとなるなど多様であり、犬としての作業意欲の高さと活発さ、好奇心の強さ、時には体力を必要とする。その目的は、方向性が一つに向けられていて、盲導犬とは大きく異なる点である。また、日常生活の中で、我々がよい生活を共有していく上で必要とされているしつけをそのまま当てはめることは作業意欲目的を始め、介助犬としての適性を止める結果となることが多々あるのも現実である。

より多くの子犬が介助犬として育つためには、上記のような適性プログラムを確立して行くと同時に、成長段階での再評価を育成初期より段階を踏んだ育成プログラムが必須である。

子犬を提供する側、介助犬としての育成をする家族の愛情と労力を考慮したとき、初めの一歩となる犬の選択における再評価は重要なことであり、今後とも評価法、見直しと評価育成結果の記録と併せて積み重ねて、確実なプログラムを作成していく必要がある。

## 考 察

子犬の選択プログラムの意義の検討

犬は人と同様に社会的な動物であり、また特定の社会的反応や行動を習得するのに適して習性を持つ動物でもある。

犬の表現型は、親から受け継いだ性格と発育中の子犬にとっての環境特に育て方との相互作用によって、作られていくものである。従って、出生後から成犬としての安定期に入るまでの成長過程における心理的発達と行動学習的発達の両面からのプログラム作成が必要となる。また、6週令の子犬の大まかな性格判定は出来るが、表現型は1年から、1年半ぐらいかけて完成されていくことを考慮すると、選択プログラムは次の2点を実行していくことを含むものであろう。

1. 成長段階に合わせた再チェックを行う。
2. 飼育家庭トレーナー、獣医師による十分な育て方の検討を行い実行していく。

このことによって、介助犬となる可能性を持つ子犬の能力を伸ばし、より効率の良い介助犬育成へと連携していかれるものと思われる。

参考として次に2つを紹介し、今後の研究のスタートとしたい。

- ①現在介助犬協会では検討し要しているパピーテスト（矢沢氏）
- ② Dr.W. フォックスの動物行動学からの性格チェック



## 介助犬協会のパピーテスト

・テストを行う年齢 生後7週間ぐらい 6週以前は小さすぎて不可 遅くとも9～10週  
まで、それ以後では環境による行動が出てきてしまう。

・時間 午前中の遅い時間 排泄、ご飯を済ませて、少し休んだ後ゆっくりした後

・環境 慣れていない場所 パピーになれている人は一緒にいても良いが、来ても無視を  
する。テストを行う人は全く知らない人。

・基本的にこの本能をみるテストなので、今までの癖や行動が出てしまうようなことはな  
るべく避けて行う。

\*人間に対する服従姿勢

## テスト内容

### ◎自由にはなして呼んでくるか

人は座って注意を引くように（名前は呼ばない）

人（その人）に対してどれだけアプローチできるか、興味を持てるか

1. すぐとんできて、しっぽを振って手をなめに来る
2. よってきて足の廻りにまわりつきじゃれる
3. よってくるがしっぽは下がっていて、様子をうかがう
4. 低い姿勢ですぐお腹を見せる
5. 呼んだ人をよけて避ける
6. その場で止まってしまうか逃げる

### ◎手をたたいて動くかどうか

人に対する服従姿勢を見る

1. 目を見てしっぽを振りながら来る
2. チョコチョコ来る
3. 様子を見ながら来る
4. 目は見ないが一応行こうとする
5. 来ない

### ◎お腹を見せ仰向けにさせる（30秒程度）

はじめもがくのはしょうがない 反抗心を見る

1. 落ち着いていて手をなめたりそのままにいる
2. 15秒ほど静かに出来る 離した後逃げないで来る
3. ずっと暴れていやがる 離しても逃げていく

### ◎膝の高さまで持ちあげる（30秒程度）

1. たしょういやがるがおちつく
2. いやいやと少しもがく
3. あばれる

### ◎パピーより大きいものを投げる（音のしないもの）

まるめたタオルなど 自分より大きい者に対する攻撃性を見る

- 1 よって行くが持ってこない

2. ためらって、しっぽをまたの中に入れ、様子を見に行く
3. かみついてふる
4. 全く興味を示さない

◎小さいものを投げて持ってくるか

興味あるなし、独占欲を見る

1. すぐくわえて持ってくる
2. 行ってにおいをかいで戻ってくる
3. くわえてどこかへ行く

◎注目しない時、不意に大きな音を立てる

1. 行ってチェックしに行く（さわる、くわえるなど）
2. においをかぐ（さわらない）
3. 様子をうかがうが行かない

◎指の間を強くつまんで反応を見る

早いほうが良しとする。刺激に対する反応、例えばトレーニング上、カラーコレクトに対する反応などに関係する。

1. 6秒以内に反応する
2. 7-8秒以内

Dr. M.W. フォックスの子犬の性格を読みとる法

犬の社会的発達において、幼児期の経験が生涯他の時期よりも成熟期以上の行動に対して重要な影響を及ぼすことが研究の結果明らかになっている。特に初期の発達段階の中に、子犬が環境的影響を強く受ける時期がある。この時期に受けた心理的ダメージは永続することも判っている。日本盲導犬協会のように、性格、行動が遺伝的に安定した親犬からの自己繁殖とパピーウオーカーとの密接な育成プログラムがあれば選択効率はよいと考えられる。

これらの研究結果は子犬の選択のための判定テスト方法にはいる前と子犬の発達段階を十分に理解する必要性を示唆するものである。参考として以下に要約して紹介し、今後の検討課題の一部とする。

発達の段階

1. 出生前期
2. 新生子期
3. 移行期
4. 社会化期
5. 若齢期

生 4週 12週 5ヶ月 1-1年半

---

生まれた時の 気質	第1期 社会化期 (移行期)	第2期 社会化期	
--------------	----------------------	-------------	--

これらの発達段階にあわせて、子犬の性格の判定をし、記録していく必要がある。

①子犬の性格判定法（生後1－3週）

子犬の行動チェック

1. 乳首の取り合い
2. 鳴き声をあげる回数。母親から離されたときの反応。
3. 冷たい地面に置かれたときに最初に鳴き出すのは？
4. 手で触ったときの反応、痛覚テスト

② 同 （4－6，8週齢）

③運動能力（4－8，12週齢）

④感覚、情緒性テスト

それまでに経験したことのない視覚及び聴覚的刺激に対する反応  
隔離に対する反応

⑤社会性テスト

⑥見知らぬ人間に対する恐れ

⑦情緒性及び問題解決能力テスト

⑧グループテスト

⑨扱いやすさテスト

⑩競争心テスト

以上のテストを通して

独立性 内向的 外向的

従属性 積極的 消極的

支配性 攻撃的 服従的 のチェックを行う。

発育段階にあわせた飼育上の指示を出していくことで介助犬としての育成率の増加を期待できるのではなかろうか。

文献

- ① B.L.I.Hart(1985) Behavior of domestic Animals
- ② ビル・キャンベル (1975) 愛犬のトラブル解決法
- ③ ジェームス・サーベル (1999) The Domestic Dog
- ④ マイケル・W・フォックス (1991) イヌのことがわかる本

# 人・障害分科会まとめ

真野行生、土田隆政

北海道大学医学部  
リハビリテーション医学講座

原 和子

名古屋大学医学部  
保健学科作業療法学専攻

樋口恵子

全国自立生活センター協議会

山田清子

研精会山田病院

村井敦士

横山記念病院リハビリテーション科

大林博美

新城大谷短期大学介護福祉教室

高柳友子

東京医科歯科大学医動物学教室

介助犬は介助機器と比較して多機能であり、また必要に応じて常に移動可能である。さらに人的介助を受けるに際して障害者が受ける精神的負担がなく、介助犬による動作は障害者本人が行う自立動作として認識されている点が人的介助とは全く異なる点である。また、犬の主人としての自尊心や責任感から障害者の作業遂行能力が向上する。このようなリハビリテーション医学的、社会的有効性によって障害者の自立及び QOL の向上が、これまでの知見と 99 年度までの本調査・研究で明らかとなっている。介助犬使用により通勤・通学率が増加し、さらに人的介助費用が年間 68 % に削減されたことは既に報告されている。また、国内外の介助犬使用者に対する調査から介助犬使用により、障害者の外出頻度の増加、社会性の改善、家族等介護者の介助時間及び頻度と共に精神的負担軽減等の効果をもたらすことが明らかとなっている。

当分科会では今年度のまとめをもとに作成した介助犬の効果表を用いて人的介助介助の削減及び機能的自立度の改善状況を評価し、さらに介助犬使用による経済的效果についても検討を進める。

## 介助犬の有効性に関する調査・研究結果

介助犬のリハビリテーション医学的及び社会的有効性と障害者からの需要について  
リハビリテーション医学的有効性－能力低下レベルに対する代償的アプローチの手段  
適応となる能力低下(WHO の ICDH 分類による)と介助犬による介助項目  
以下 ICDH の番号

### 3. 個人ケアの能力低下

- 35 衣服の着脱能力低下：衣類、靴下の着脱介助
- 36 その他の着脱の能力低下：靴の着脱介助